



学会ホームページ <http://jasce.jp>

072号 (2023年9月20日)

目次

- 第19回全国大会 (広島) 情報
- 『協同と教育』への投稿募集中
- 第8回オンライン講座「日本の協同学習」のご案内
- 学会ワークショップ
- 今後の予定 (判明分)
- 中止になった学会ワークショップ (報告)
- 各地の研究会・勉強会
- ショートレター(会員からの投稿記事)

第19回全国大会 (広島) 情報

11月4日(土) - 5日(日)に対面形式による広島大会が開催されます。大会テーマは「協同学習から探究を問いなおす」です。学生・生徒・児童一人一人の主體的な学びや探究と学びの関わりから、協同学習を通して探究をよりクリアにしていきたいと思えます。

今大会では、初等・中等・高等教育までをカバーした研究発表(7件)・実践報告(26件)が予定されています。加えて、学会参加者の皆様に楽しく学びながらスキルや知識が獲得できる、多彩な体験的ワークショップ(6件)と対話やアイディ

アの共有を通じて、新しい洞察が得られるラウンドテーブル(5件)を用意しています。大会期間中、さらなる学びと交流の機会を提供するために、研究発表・実践報告に加えてこれらのワークショップやラウンドテーブルにぜひご参加いただければ幸いです。

学生・生徒・児童の主體的・対話的で深い学びにつなげていけるよう、協同学習から探究を問いなおしていき、未来に向けて一緒に新たな視点やアプローチ、アイデアを探究していきましょう。

1. 大会テーマ
「協同学習から探究を問いなおす」
2. 大会日程
1日目: 2023年11月4日(土)
2日目: 2023年11月5日(日)
*プログラムの詳細につきましては決定次第ホームページに掲載します。
3. 大会参加申込締切日
2023年10月20日(金)
4. 大会参加者専用サイト
参加者専用のサイトを開設します。大会参加費納付済みの方に「発表要旨集録閲覧サイト」「大会当日サイト」のアクセス情報をお届けします。

5. 大会に関する問合せ先

日本協同教育学会第19回大会実行委員会

E-mail: taikai@jasce.jp

第19回大会実行委員長 佐々木 淳

『協同と教育』への投稿募集中

『協同と教育』への投稿を随時受け付けています(次号は第19号です)。投稿受理から査読を経て採択が決定されるまでに通常数ヶ月以上を要します。みなさまの積極的な投稿をお待ちしております。

第8回オンライン講座「日本の協同学習」のご案内

前号でもご案内を差し上げましたが、2023年9月30日(土)14時から、第8回オンライン講座「日本の協同学習」を開催いたします。この講座は、学会設立15周年を記念して会員の皆さまに配本した『日本の協同学習』(2019, ナカニシヤ出版)をテキストとして1章ずつ学ぶものです。第8回は三重大学教授の中西良文先生と三重大学准教授の長濱文与先生を講師としてお迎えし、第7章「日本における協同学習の実証的研究」のご講話と、そのご講話に基づく参加者間の交流を予

JASCE

定しています。テキストをご準備いただければ、未入会の皆様の参加も大歓迎です。参加費は無料です。

なお、参加申込の締切は、9月24日(日)24:00です。学会ホームページから申し込んでください。その後、順次、参加申込者宛にメールで「Zoomの案内状」を送ります。案内状に書いてある手順で参加してください。皆さまのご参加をお待ちしております。

研修委員会 (kenshu@jasce.jp)

各地の研究会・勉強会

(名古屋・東海地域)

名古屋・協同の学びをつくる研究会
◇2023年7月例会を7月15日(土)13時30分から名古屋大学教育学部・共通講義棟第3講義室で開催しました。テーマは「自分らしく学び続ける子どもを育てる」。発表者は、久川慶貴先生(春日井市立藤山

台小学校)。参加者は20名。東京・浜松・大阪・米子からのご参加もありました。

久川先生は、自分らしく学び続ける子どもを育てることを目指しています。ICTの活用は授業以外(日常)から入る方が理解しやすい。教師(大人)自身が問題解決でICTを活用することがスタートになります。子どもの問題解決は大人の問題解決の相似形だからです。最初のうちは教師がICT活用方法の選択肢を示しますが、子どもは他者の学び方からも学び、自分で方法を選んで行動できるようになります。はじめのうちは、学習過程や見方・考え方を教師が教え、「自分で学びつづけられるようになる」という考え方を伝えます。

教師はGoogle Classroomに学習に必要な情報を整理し、学級で共有します。①学び方や②評価基準もオンラインで示します。子どもたちは学び方を学ぶことで「自分でできる」ようになります。Google Classroomは課題提出の場でもあります。ポートフォリオや活動の様子は、お互いにいつでも見ることができます。集めた情報を整理・分析する場面で、子どもは他者の学び方(具体的なスキル)も参照しながら学びます。個人と全体の学びの過程はクラウド(ポートフォリオ)に蓄積されるので、子どもが何を・どんな方法で・どのように頑張ったのかを評価することができます。大切にし

学会ワークショップ 今後の予定(判明分)

<ベーシック>

2023年11月11日(土)、12日(日)【共催】

会場：大阪YMCA会館(大阪YMCA国際文化センター)(大阪市西区)

講師：サルバジョン有紀・石田裕久

<アドバンス>

2023年12月9日(土)、10日(日)【主催】

会場：東海学園大学名古屋キャンパス(名古屋市天白区)

講師：水野正朗・石田裕久

詳細情報、参加のお申し込みは学会HP(<https://jasce.jp/1031workshop.php>)からお願いいたします。

中止になった学会ワークショップ(報告)

以下のワークショップは最小催行人数に達しなかったため、残念ながら中止となりました。

<ベーシック>

2023年8月26日(土)、27日(日)【主催】

会場：中村学園大学(福岡市)

JASCE



たいのは、その子らしい学びに寄り添うことです。最初のうちは、教師が「前に立って支援」し、問題解決に向かう「学び方」(学習目標・学習内容・学習方法・学習過程・学習評価)を子どもに教えますが、次第に「横に立って支援」そして「後ろから支援」に移行していきます。

自分の問いにこだわることで、連続して問いが生まれます。追究を続ける子どもたちの姿が印象的でした。

◇次回の例会は日程未定ですが、11月頃に開催する予定です。報告者は、大村勝久先生(静岡県立浜松北高等学校・数学)を予定しています。

連絡先: 水野正朗(東海学園大学 mizuno-ma@tokaigakuen-u.ac.jp)

(大阪地域)

協同学習を用いた看護教育研究会

◇第49回「協同学習を用いた看護教育研究会」は、2023年8月19日(土) 13:30～17:00に、藤田医科大学で開催しました。講師2名と

医学書院の取材担当編集者と、参加者35名が、北海道・東京・富山・静岡・愛知・三重・京都・大阪・兵庫・沖縄から集われ、初参加の方は8名でした。

今回は、テーマを「看図アプローチ・実践編」として、5月に引き続き、北海道教育大学名誉教授、全国看図アプローチ研究会会長の鹿内信善先生を講師にお招きしました。同研究会専属アートスタッフの石田ゆき先生もご同行されました。「看図アプローチ」の理解を深めるために、鹿内先生の講義の後に、実践編として術後観察をテーマにした「VR看図アプローチ」を用いた授業実践報

告とVRを用いた体験(織田千賀子他)を実施しました。

最初のアイスブレイクでは、石田先生にご担当いただき、微笑ましい「きゅうちゃん」や心とむカラーのイラストにより、参加者たちは対話を楽しみ心温まるウォームアップとなりました。次の「看図アプローチ」の講義では、鹿内先生にご担当いただき、認知心理学の理論に基づく「ものこと原理」と「ものこと原理の理論を看護教育に適用する実践法」を体験的に学習し「看図アプローチ」に対する理解を一層深め合うことができました。最後の「VR看図アプローチ」のセッションでは、同大学看護学科の教員がVRの操作方法をサポートしながら、参加者全員がVRヘッドセットを同時に使用し、さらにタブレットを2人で1台共有しました。VRと看図アプローチを用いて、学生がどのように学習しているのか、その教育方法について一部体験をしていただくことができました。

研究会終了後のアンケートでは、看図アプローチについて回答者全



鹿内信善先生のご講義中の場面

JASCE



参加者がVRを体験している場面

員が「とても理解できた・ある程度満足できた」と回答し、「看図アプローチのステップごとの思考を引き出すための質問例や、看護の授業での応用例を学ぶことができた」「要素関連付けの質問は、状況をそのまま説明する考え方が理解できた」「納得感を得られた」「実践を研究としてまとめたい」などの感想が寄せられました。また、「VR術後観察看図アプローチ」の授業実践については、回答者全員が「ある程度理解できた・とても理解できた」と回答し、「2Dの写真だけでは伝わらない臨床現場の臨場感をVRで体験したことで、看図アプローチの重要性を実感した」「急性期の教育に関わる者として、看図アプローチの各段階やビジュアルリテラシーの大切さを理解した」「看図アプローチを通じて探究心を育てられる可能性を感じた」などの感想が寄せられました。

今回の研究会は、藤田医科大学保健衛生学部看護学科教員の協力を得て開催しました。準備期間の取り組みを通して、教員が協同する意義

についても体験的に理解を深める機会となりました。(文責：織田千賀子)

◇今後の開催予定

第50回：2023年11月18日(土)

第51回：2024年1月20日(土)

第52回：2024年3月17日(日)

次回の第50回は、11月18日(土) 13:30～16:30、会場はグランフロント大阪北館2階のナレッジキャピタル「The Lab」アクティブスタジオで、対面とオンラインでのハイブリット開催を予定しています。テーマは、「協同学習の継続的な実践と成長をめざして!」を予定しております。是非ご参加下さい。

問い合わせ先：研究会代表 緒方 巧(t-ogata@baika.ac.jp)

(中四国地域)

協同学習研究会(岡山)

◇去る8月19日(土)の午後2時～5時30分、本研究会初の「ハイフレックス」にて今年度第1回の協同学習研究会を開催しました。技術的な不安はありましたが、オンライン

で17名、対面で16名の方にご参加頂き、盛会の裡に終えることができました。

ご発表頂いたのは岡山県立倉敷青陵高等学校指導教諭の村山大輔先生です。「公立普通科進学校における組織的授業改善の取組－「教師の協同学習」を実現するために」と題し、同校の指導力向上研究委員長としての取組をご紹介頂きました。

同校では、1年目(令和4年度)：授業の目標を適切に設定する、2年目(令和5年度)：目標を達成するために最適な授業を計画し実施する、3年目(令和6年度)：目標をもとに評価を行い生徒の学力を伸ばす、という3年計画で授業改善に取り組んでいます。

昨年度の取組から、「授業の冒頭に目標を設定し、生徒に示す」意義と必要性について共通理解と共通認識を持つことはできたようです。しかし、それを授業で実践できている教師は少数に止まり、また解説主体の一斉授業も多く見られます。その一方、校内の教員対象の意識調査では「自分はある程度授業改善に取り組んできた」と答える者が7割を超えていました。つまり、ひとりひとは「授業改善に向けて一定の努力を重ねている」と思っているのですが、客観的には授業改善が十分に進んでいない現状があります。

この現実に対し、授業改善に係る目標を校内で共有し、かつひとりひとりの授業実践に対する自由度と創

JASCE

造性を高めるために何が必要か、研究会では様々な角度から議論しました。このテーマは今秋の第19回大会ラウンドテーブルでも引き続き議論します。皆様のご参加をお待ちします。

◇今年度は下記の日程を予定しています。いずれも土曜日の午後2時からです。第1回と同様、ハイフレックスでの開催を予定しています。当会は実際の授業(1時間)を視聴し、これに基づいて議論を深めることを大切にしています。県内外からのご参加をお待ちします。

第2回:9月23日 林原和彦先生(伯耆町立溝口中学校)・道徳

第3回:12月2日 田中智大先生(広島市立美鈴が丘高等学校)・日本史

第4回:3月2日 穴戸聖人先生(三朝町立三朝中学校)・社会科
連絡先:高旗浩志(岡山大学 takahata@okayama-u.ac.jp)

(九州地域)

第58回「協同教育研究会」

◇第58回「協同教育研究会」の開催が近づいています。今回も「対面」で開催します。皆様の参加をお待ちしています。

1.日時:研究会・2023年9月23日(土)13時00分~16時15分(情報交換会・16時15分~17時00分)

2.場所:久留米大学御井本館3階13BC 教室

3.主な内容

(1) 協同カフェ「グループ活動って、難しい・・・?」

担当:平上久美子・比嘉真子(名城大学)

内容:学校や職場におけるグループ活動について、参加者の皆さん全員と語り合いたいと思います。まったくの前提条件なしに、グループ活動に関する知識や経験に関係なく、グループ活動について常日頃気になっていることを語り合いませんか。聴くだけでも構いません。

(2) 講話と対話

講師:関田一彦(創価大学)

内容:協同教育とは何かを問い直し、協同教育と協同学習との関係や、協同教育でしばしば使われる「言葉」について再度確認したいと思います。短い講話の後、会場の皆さんとの対話を深めたいと考えています。

詳しい日程は、協同教育研究所「結風」のHP(<http://yuikaji.me/>)をご覧ください。

問い合わせ先:ご不明な点があれば、次までお願いします。

協同教育研究所「結風」(office@yasunaga.me)

(全地域)

全国看図アプローチ研究会

◇『全国看図アプローチ研究会研究誌』18号を公刊しました。

掲載論文

1. 特別支援学級における行事作文

指導-看図アプローチで思い出す-(田中岬)

https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.18_pp.3-34.pdf

2. 看図アプローチを活用した定時制高校4年生における英作文の授業実践-2022年3月の実践との比較-(江草千春)

https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.18_pp.35-47.pdf

3. 看護を「想像」し「創造」する授業-精神看護における「看図作文」と「きゅうちゃん」のカー-(田中雅美)

https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.18_pp.49-54.pdf

4. 編集後記(鹿内信善)・奥付
<https://kanzu-approach.com/journal/journal-vol.18-henshukoki.pdf>

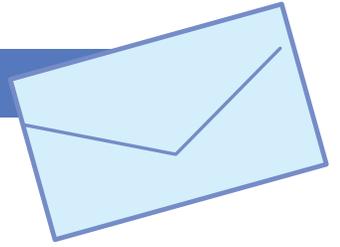
◇「きゅうちゃん絵本プロジェクト」で新しいシリーズが始まりました。

【きゅうちゃん看護物語】です。Part.1は「きゅうちゃん、直腸がんになる」です。

☆藤田医科大学保健衛生学部看護学科学生さんたちが主体的に取り組んだ学習成果です☆

<https://www.youtube.com/watch?v=dPRaqlCvRNng&t=411s>

連絡先:研究会事務局長 石田ゆき(kanzu.approach.office@gmail.com)



改めて本物の協同学習が求められている

今から四半世紀前、私は1997年から98年にかけて、ジョンソン兄弟が所長を務めるミネソタ大学の協同学習センターに客員研究者として滞在した。少し年配の方なら覚えておられるだろうか、当時はWindows95そして98というOSが登場し、インターネットの本格普及が始まったところであった。私はその頃、勤務する大学で情報教育を講義していた。匿名で情報の受発信が行われるサイバースペース（ネット社会）が急速に広がる時代の変化を前に、私は授業現場での対面交流を確かにする必要性を強く感じ、協同学習の普及に取り組み始めた。

当時の学校は、今以上に一斉指導型の授業が主流であった。学級の中では自然発生的に様々な交流（コミュニケーション）が生じるが、それは必ずしも生産的・建設的なものとは限らない。生徒たちが一日の中でもっとも長い時間を費やす授業において、教師の話量は圧倒的であり、生徒たちは個々にそれを受信・受容し、教師は任意な指名でその受容状態をモニタするのが一般的であった。学年が上がるにつれてパッシブな学習態度を生徒たちに刷り込んでいく一斉授業では、生徒たち同士で課題達成に向けて話し合う機会は十分に保障されていなかった。目の前のリアルな相手と共に課題解決に取り組む話し合い（≒対話）を進める技能や成功体験が乏しいままに、相手の見えないネット社会に生徒たちが飲み込まれていくリスクは看過できないと考えたのである。

世紀が変わり、2010年代になると

アクティブ・ラーニングという言葉が一世を風靡し、最近では、主体的・対話的で深い学びが求められ、対話という言葉が注目されている。当時に比べると協働的な学習活動は一般的となり、授業中に生産的・建設的な交流が生じる機会は増えてはいる。その一方、教室の外ではネットを介したコミュニケーションが空気のように当たり前となり、LINEのチェックにスマホを手放すことができない生徒も増えている。

こうした中で今、ChatGPTに代表される生成AIの開発が進み、「個別最適化学び」のツールとしてその教育利用が真剣に検討されている。「子どもの発達段階や実態を踏まえ」という但し書きはついてはいるが、グループの考えをまとめたり、足りない視点を見つけ議論を深めるために、あるいは英会話の練習相手としての活用が推奨されている。即時に応答してくるAIに、つつい批判的思考が滞り、その回答に依存してしまうことがないように注意していきたい。

初期の人工知能“イライザ”でさえ、人間以上に人間を惹きつけることがあった。ましてや生成AIは人間が好ましい（本当らしい）と感じる文字列を組み合わせるので、生身の人間よりもその人に合った応答が期待できるかもしれない。しかし、個別最適化された対話型AIを相手に、私たちが育てたいコミュニケーション力は伸びるのだろうか？誤解や思い込みで意図が通じず、すれ違い、葛藤する対話の困難さに耐えて相互理解を深める力をどのように育てるのか、留意しておきたい。

対話は互いの在り方、人生に多少なりとも影響を与え合う。葛藤や対立を伴う対話であっても、相手の思いや考えを聴くことで、相手の主張に対する何らかの感情が聞き手の中に生じる。その思い・感情に促された応答は、同様に相手の中に何らかの思いを生じさせる。このように対話を通じて、意識するしないに関わらず、何らかの思いが互いの心に生じ、生じた思いに応じたやり取りが進む。対話とは双方が影響を与え合う行為である。ところが、人ではないコンピュータには在り方という意識も、ましてや人生もない。したがって、コンピュータのプログラムであるAIとの疑似対話では、AIの側には何らの思いも生じない。人間の側が、AIが生成する記号を「言葉」として解釈し、言葉の向こう側にあるはずと信ずるAIの「思い」を勝手に想像するだけである。

私は大学の授業で、ディスカッションは苦手だと吐露する学生に出会うことが少なくない。中学や高校でもアクティブ・ラーニングで育ててきたはずなのに、である。そんな学生たちも協同学習を通じて学び合う中で、正解探しを超えた本音の対話を交わし始める。とはいっても、大学の授業は所詮週1回90分の枠の中である。もっと高い頻度で、様々な教科の中で、互いの学びに影響し合う体験を積んでほしい。与えられた“最適な答え”を寄せ集める作業ではなく、答えに至ったプロセスを味わい合う時間を確かに生み出す協同学習が、改めて学校教育に求められている。

（創価大学 関田一彦）